

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：35404

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12907

研究課題名（和文）近現代沖縄における新旧暦の位相に関する科学社会史的研究

研究課題名（英文）Historical Study on New and Old Calendar in Modern Okinawa

研究代表者

宮川 卓也（Miyagawa, Takuya）

広島修道大学・人間環境学部・准教授

研究者番号：00772782

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：「琉球処分」以降、三度の統治者交代を経験した近代沖縄・琉球において、新旧両暦が約百年間にわたって併存（共存）していたことを種々の資料（暦書、カレンダー、新聞・雑誌など）の分析を通じて明らかにした。沖縄における新しい時制への移行は、科学的合理性や統治者権力などによって表面的には強権の変更が進められたが、実際には社会経済的状況の変化とともに暮らしの緩やかな変化とともに進んでいったことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

19世紀後半から20世紀後半にかけての約百年間、日本（本土）を除く東アジアにおいては、新旧両時制が併存（共存）していたことを、沖縄の事例を通じて示した。これは、東アジアの共通かつ重要な特徴で、新しい科学、科学的合理性が、新しい時制の急速な普及をもたらしたわけではないことを示唆している。敷衍すれば、いわゆる近代と呼ばれる時代は、新しい科学技術や科学的合理性によってすべてが一新されたのではなく、新旧の文化が約一世紀間は共存しており、社会経済的状況の変化とともに緩やかに変化していったことが示されたといえる。

研究成果の概要（英文）：After the "Ryukyu Disposition," modern Okinawa/Ryukyu experienced three changes in rulership, during which both the old and new calendars coexisted for about a century, as revealed through analysis of various sources such as almanacs, calendars, newspapers, and magazines. The transition to a new time system in Okinawa involved superficially authoritarian changes driven by scientific rationality and ruling authority. However, it became evident that the shift actually progressed alongside gradual changes in people's lives, reflecting socio-economic transformations rather than strictly enforced measures.

研究分野：科学史

キーワード：新旧暦書・時制 沖縄・琉球の暦・時制

1. 研究開始当初の背景

2016年度から3年間、「『朝鮮民暦』における伝統知と近代知の交錯についての科学史研究」(若手B、課題番号:16K16337)を進めるなかで、朝鮮とまったく同じではないが、「内国植民地」であった沖縄においても現代まで旧暦が使用されている状況が気にかかった。当該課題は、植民地朝鮮において朝鮮の文明化を謳う朝鮮総督府がなぜ旧暦を含む暦書を発行し続けたのかを問うものであった。また、植民地支配からの解放後においても韓国では旧暦とそれに基づく文化が根付いている文脈についても検討した。同様の問いが沖縄に関しても投げられるのではないかとこの発想にいたった。すなわち、「琉球処分」および戦後の米軍統治は、沖縄を植民地的状況下に置くものであり、そのなかで旧暦とそれに基づく慣習が生き続けたという事実は何を意味するのかを講究することが、次の研究課題として浮かび上がった。同時に、「時の近代化」が東アジアにおいてどのように進化したのか、日本だけが旧暦を(ほぼ)使用しないのはなぜなのか、「時の近代化」とは何を意味していたのかなど、より大きな問題群へ発展しうる可能性を見出した。

2. 研究の目的

本研究は、近現代沖縄における旧暦の編纂、流通、役割、そこに込められた人びとの認識と実践、新旧の暦に関する知識人たちの科学言説などを検討し、沖縄において旧暦が民衆生活のなかに生き続けている要因・文脈、沖縄における近代的時間意識の形成・変遷を明らかにすることを目的とする。そのため、以下のような問いを立てることができる。

沖縄において、なぜ現代にいたるまで旧暦が命脈を保っているのか。沖縄では、朝鮮とは旧暦をとりまく歴史的・社会的文脈がまた異なるかたちで働いていたと考えられるが、それは何だったのか。例えば、沖縄には朝鮮総督府のような植民地権力は存在せず、帝国の尖兵として戦争への動員が進められた一方で、「内国植民地」と呼ばれる状況に置かれ、強い民族差別を受け、同化教育と皇民化政策が強力に進められた「文明化」の対象であった。置県当初は「旧慣温存」が実施されたものの、新しい教育や社会制度が沖縄社会に徐々に浸透していく中で、沖縄の各種年中行事はなぜ旧暦で執り行われつづけたのか。沖縄や本土の知識人たちは、そうした状況についてどのように論じたのか。沖縄の民衆は新暦についてどのように認識し、その認識は時期によってどのように変遷したのか、あるいはしなかったのか。さらに戦後、沖縄をとりまく政治社会的状況は大きく変わる。米軍統治下、すなわち新たな植民地的状況に置かれた沖縄において、旧暦の伝統はどのように紡がれたのか。誰がどのように旧暦を含む暦書の維持に参与したのか。米軍当局は沖縄の慣習に関してさまざまな調査を行なったが、沖縄の人びとの生活基盤たる時制についてどのように認識し、論じたのか。戦後も旧暦ベースの伝統的慣習を保った沖縄民衆の思想とはいかなるものだったのか。

これら一連の問いをつぶさに検討する作業を通じて、沖縄にとどまらず、19世紀後半に始まる東アジアにおける「時の近代化」の様相が各地でどのような差異を示すのか、それらの差異は何を意味するのか、「時の近代化」とははたして何であったのか考察することを目的に据える。

3. 研究の方法

文献調査を主な手段とし、(当初は予定していなかったが)必要に応じてインタビューも実施した。より具体的には、琉球処分前後に琉球王府から編纂・発行された暦書、明治政府発行の暦書の収集にはじまり、20世紀に入って那覇の知識人や久米島の知識人が編纂した暦書、戦前・戦後を通じて沖縄で発行された新聞や雑誌記事などを一次資料とした。

また、インタビューをつうじて戦後における暦の使用状況について詳しく話を聞いた。

4. 研究成果

「琉球処分」以降、三度の統治者交代を経験した近代沖縄・琉球において、新旧両暦が約百年間にわたってへ依存(共存)していたことを種々の資料(暦書、カレンダー、新聞・雑誌など)の分析を通じて明らかにした。沖縄における新しい時制への移行は、科学的合理性や統治者権力などによって表面的には強権的変更が進められたが、実際には社会経済的状况の変化にともなう

人びとの暮らしの緩やかな変化とともに進んでいったことを明らかにした。

20 世紀初頭には、少なくとも数名の暦学に通じた人士（サンジンソーや風水師など）が独自に暦を編纂し、販売していた。彼らのなかには、琉球王国時代に暦官を輩出した久米島に出自をもつ者や、古くから集落においてサンジンソーを生業としてきた家系の者など、前世紀以来の知識人階級が明治以降も編暦を続けていた。また遅くとも 1930 年代には、高島暦が沖縄に入っており、新聞にも高島暦が掲載されていたことから、その広がりをうかがわせると同時に、旧暦が根強く利用されていたことも確認できた。

戦後、アメリカの統治期に入っても旧暦の使用は続けられるが、1950 年代後半から活発化した「新生活運動」の一環として旧正月を廃そうとする「新正月実施運動」が市町村や婦人会などを中心に繰り広げられた。学校をはじめとする公共の場では新暦が使用されていたものの、家庭においては旧正月を祝う慣習が続いていたため、正月行事を支えていた女性たちが廃止の声を上げていた。しかし旧暦の慣習は地方ほど根強く、旧正月の期間になると、周辺の町村や島から那覇市内に出稼ぎに来ていた人びとも故郷に帰ってしまい、那覇においても旧正月を廃止することは容易でなかった。沖縄全体で新暦へと移行していくのは、「本土復帰」前後から徐々に進んでいったが、結局のところ、現代にいたっても完全に失われてはいない。新正月で過ごすことの合理性や、新暦の「科学的正しさ」などが幾度も叫ばれたが、それが人びとの長く続く慣習を変えるにはいたらなかった。

以上のように沖縄における暦の位相の変遷は、19 世紀後半から 20 世紀後半にかけての約百年間、日本（本土）を除く東アジアにおいて、新旧両時制が併存（共存）していたことを示している。これは、東アジアの共通かつ重要な特徴で、新しい科学、科学的合理性が、新しい時制の急速な普及をもたらしたわけではないことを示唆している。現代においても正月などを旧暦で過ごす慣習が残っているのは一つの証左である。敷衍すれば、いわゆる近代と呼ばれる時代は、新しい科学技術や科学的合理性によってすべてが一新されたのではなく、新旧の文化が約一世紀間は共存しており、社会経済的状況の変化とともに緩やかに変化していったことが示されたといえる。

近代以降の新しい暦や新しい時制の導入にともない、人びとの意識や行動、社会がどのように変化したのかという研究はなされてきたものの、前近代の時制がなぜ、どのように残り続けたのかを探る研究は、国内でも国外でもほとんど進められてこなかった。暦そのものの研究については、近代以前、「伝統科学」の枠組みで、前近代の天文学史・暦学として探求されるものであった。本研究は、科学の産物かつ人びとの暮らしに深く関わる暦が、科学技術が大きく進展した近現代においても容易に変わりにくい特質をもっていることを示した点において、その意義を示せたといえる。

報告者の前課題と現課題はそれぞれ朝鮮と沖縄を事例としたものであったが、今後、台湾や中国本土など東アジア全域を射程に入れることで、日本をふくむ近現代東アジアの時制について再考する課題につながるものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Takuya Miyagawa
2. 発表標題 Traditional Time in Modern Time: Lunar Calendar in Colonial Korea and Okinawa
3. 学会等名 International Workshop for the Trans-Asian History of Science ,Medicine, and Environment in South Korea and Japan (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Takuya Miyagawa
2. 発表標題 Traditional Time wih Changing Rulers: Lunisolar Calendar in Modern Okinawa
3. 学会等名 16th International Conference on the History of Science in East Asia (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------